水俣　取り戻せない歳月をへて

昨日のレポート冒頭でも述べたように、水俣病が公式に確認されてから 5 月 1 日で 60 年になる。朝日新聞 5 月 1 日 福島申ニ編集委員「日曜に想う」が心に響いたので抜粋して紹介したい。

「二人　いたわり」　絵・皆川明

経済白書に「もはや戦後ではない」とうたわれたその年（1956 年）の 4 月。手元の文献によれば私が生をうけた頃、熊本県水俣市で 5 歳の女の子に異変が起きた。きのうまで元気に走り回っていたのに、朝起きると口が回らず、茶碗も持てなくなったという。歩くこともままならない。

魚が湧くといわれた不知火海のほとりの集落に女の子は生まれた。潮騒のもたらす恵みはこの子の心身をすこやかに育むはずだった。だが工場廃水から魚や貝に蓄積されたメチル水銀が、海辺に暮らす老若男女に牙をむいた。何日かすると同じ症状が妹にも現れた。

5 月 1 日、病院は保健所に「原因不明の疾患発生」を報告する。それが「水俣病の公式確認」として刻される日となった。暦はめぐって今日で 60 年になる。わが齢に重なる歳月は、生きる方向を閉ざされ、ねじ曲げられてしまった多くの人々の、取り戻しのきかぬ月日である。

坂本しのぶさん(左)とともに(提供　朝日新聞社)

入り江の奥、小さな漁港の近くに坂本しのぶさんの家がある。私と同い年のしのぶさんは、母親が食べた魚介によって胎内で水銀に侵された胎児性患者だ。（写真は『対話集　原田正純の遺言』所収のもので、坂本しのぶさん、母親のフジエさん、そして原田正純先生が写っている）体をよじり、全身を絞るように言葉を発する。水俣に生まれたのを恨んだことが何遍もあったそうだ。

しかしそれは歳月とともに消えた。いまはふるさとがとても好きと語る。だが隠蔽と虚偽で真実を覆い、原因となる廃水を流し続けた加害企業チッソへの恨みは決して消えることがないと言う。

80 人以上とみられる胎児性患者には私と同年配の人が多い。両親から「宝子」と大事にされた故・上村智子さんも同い年だ。寝たきりで言葉は発せず、瞳は生涯ものを見ることがなかった。母親に抱かれて入浴する写真が水俣病を世界に知らしめたのを、ご記憶の人もあろう。

智子さんの下の 6 人のきょうだいに症状はなかった。毒を一人で吸い取ってくれたという思いから「宝子」と呼んだのだった。ところが水俣病の損害賠償訴訟に加わると、こともあろうに家に来た報道関係者に言われたそうだ。「お金が入るから宝子ですか」。父親の好男さん（81）は、いまでも悔しそうに顔をゆがめ、目をしばたかせる。

奇病とされた当初から、水俣病ほど偏見と差別、誹謗と中傷にまみれてきた公害病もない。取材の別れぎわ、好男さんは私に「智子と同じ年なんですねえ」と 2 度言って涙ぐまれた。高度経済成長の陰画ともいえる、言われのない理不尽を彼女は背負わされた。それが私ではなかったのは、ただ偶然でしかない。

3 年前、五輪招致演説で福島原発事故の状況を「アンダーコントロール」と言った安倍首相は、同じ秋に熊本県であった水銀条約外交会議へのビデオメッセージで「水銀による被害と、その克服を経た我々」と発言した。しかし今なお、不知火海の水銀禍はどこまで広がったのかも解明されていないのが実情だ。

60 年前に「水俣病の発見者」となった病院長の細川一医師は後年、公害においては防止こそが重要との言葉をノートに残したという。痛恨の思いがにじむ。取り戻しえぬ歳月をへて、経済至上・産業優先のもたらした悔恨と教訓が、この国で共有されたかどうかは疑わしい。

（2016 年 5 月 3 日）